武鑑（ぶかん）　―献上された蕎麦（そば）

〈解読文〉

〇上　小川町　大手ヨリ十二丁

雁間　寛政三亥十二月　家督

朝散大夫

内藤大和守頼以

御内室　稲葉丹後守正謀娘

献上　巻物五　子寅辰　六月

銀馬代　午申戌　参府

拝領　巻物五　丑卯巳　六月

未酉亥　御暇

〇中　四谷内藤宿　〇下　しぶや　〇下　深川しまた丁

御嫡　内藤良之進頼客

時献上　三四月之内　信州芽独活　暑中　信州寒晒蕎麦

在着御礼　二種一荷　八九月之内　信州松茸

寒中　岩茸

浄土　内藤宿　大宗寺

三万三千石　居城信州伊那郡高遠　江戸ヨリ　上州通六十四り

甲州通五十五り

晴信時代仁科氏居之後保科弾正忠正直京極修理大夫高知慶

長五再保科弾正忠正直同肥後守正之寛永十三鳥居主膳正

忠春同兵部少輔忠常同播磨守忠救元禄四年内藤駿

河守清長以後領之

当主　内藤大和守頼以

〈用語の解説〉

・小川町…神田小川町。「上」は江戸上屋敷のこと。中屋敷は四谷内藤宿に、下屋敷は渋谷と深川島田町にあった。

・雁間（かりのま）…殿席（でんせき）。江戸城内での大名の詰所。雁之間は取り立てられた譜代大名の席。幕末、雁之間詰めは42家で、石高の平均は四万七千石余であった。

・朝散大夫（ちょうさんたいふ）…従五位下（じゅごいのげ）の唐名。

・内藤大和守頼以（よりもち）…藩主在任は寛政3（1791）～文政3（1820）年。

・内藤良之進頼客（よりかた）…頼以の次男。長男頼敦の夭逝（ようせい）により嫡子（ちゃくし）となったが、のちに廃嫡された。詳細は不明。三男の頼寧（よりやす）が家督を相

続し、藩主となった。

・家紋…下り藤の丸。丸に十文字。五七の桐。

・槍印…行列用の道具として用いる。鞘や柄の形状・材質に関する注記がある。

・纏…一種の馬印。

・参府…参勤交代の期日。譜代大名は在府1年の6月交代を原則とした。参府は「子寅辰午申戌」年であった。

・大宗寺…浄土宗。内藤家の菩提寺。

・江戸ヨリ…江戸から高遠までの距離。上州道（中山道）では64里、甲州道（甲州道中）は55里。

〈解説〉

「新板改正　文化武鑑」（武鑑）は、大名および幕府役人の名鑑である。版元は民間の本屋で、17世紀ごろに出版されはじめ、慶応3（1867）年の大政奉還まで出版された。社会の需要に応えて、年を追うごとに厚くなり、その改訂の頻度は年に数度から月に数度まで増えた。史料は文化13（1815）年版の武鑑である。

御三家をはじめとする大名家、幕府役人に関する情報を記している。その内容は、家紋・名前・江戸城内での大名の詰所・内室や嫡子の名前・参勤交代の時期・江戸の屋敷地と菩提寺など、多岐にわたっている。最上段には系図、下段には年寄・番頭・用人などの名前が列記されている。幕府の諸役所をはじめ、大名家・公家、商職人・上層農民などの実用書として、また江戸土産としても利用に供された。

項目中に「時献上」がある。お中元・お歳暮のように、季節ごとの将軍家への献上品である。定例化したものであったが、忠誠の証でもあり、それは身分や家格によって細かく制限されていた。「三四月之内　信州芽独活」「暑中　信州寒晒蕎麦」「八九月之内　信州松茸」「寒中　岩茸」とあり、高遠藩から将軍家への献上品が挙げられている。

寒晒蕎麦の献上は、享保7（1722）年以降のことである。享保の改革の一環として、大名からの献上品を縮小・簡素化する方針が示された。すなわち「領分土産にあらざる物は献上相止め候事」として、献上品を領内の特産品に限定するとした。

『世乗』六の享保7年4月の条に、次の記事がある。

年々十一月中塩引鮭五尺献ぜられ候ところ、自今暑中御機嫌伺いとして信州寒晒蕎麦一箱差し上げらるべきの旨、御伺いなされ候ところ…御伺いの通り相済む

それまで11月中に献上していた「塩引鮭」を、暑中の「寒晒蕎麦」に変更することを願い出ている。以降は寒晒蕎麦が献上されることになった。高遠藩のほかに高島藩でも寒晒蕎麦を献上していた。『本朝食鑑』に「臘月（12月）、殻のついたままの好い蕎麦を三十日間水に浸し、立春の日に取り出し、曝乾してから収蔵する」と記され、珍重されたという。

享保20年、諸国に産物調査が命じられ、それにともない作成された「高遠領産物書上帳」にも、献上物として「松茸」「芽独活」「蕎麦」「岩茸」の四品があげられている。

【参考文献】
・石井良助監修『編年江戸武鑑　文化武鑑』柏書房
・竹内誠編『徳川幕府事典』東京堂出版
・『長野県史　近世史料編　第四巻（一）』長野県史刊行会